

生成AI特許調査サービス 「サマリア」PR検証レポート

「再現率100%」の解剖と知財実務への真の示唆

調査報告日:	2026年9月12日
対象文書:	2026年9月10日付プレスリリース(パテント・インテグレーション株式会社)
評価視点:	統計的頑健性・検証手法・実務適合性



検証サマリー：PRの裏側にある3つの真実



革新性

独自の「類語シソーラス拡張」。
10万件以上の拒絶理由通知書を
活用し、審査官の思考プロセス
に基づく高度な検索式拡張を実
現。技術的アプローチは極めて
秀逸。



脆弱性

「再現率100%」は正解26件と
いう極小サンプルでの結果。市
販適過去問の使用によるデータ
リーク(学習データ混入)リスク
が排除されておらず、実務環境
の網羅性とは直結しない。



実務への示唆

AIへの業務移行は不可避。知
財専門家の役割は「検索の実行
者」から、AI出力の「観点設計・
結果検証者」へと根本的にパラ
ダイムシフトする。

センセーショナルな見出し：2026年9月10日のPR発表内容

対象

2024年度 特許検索競技大会アドバンストコース過去問（電気・機械・化学医薬の3分野）。

手法

新機能「類語シソーラス拡張」による検索式生成+AIスクリーニング。

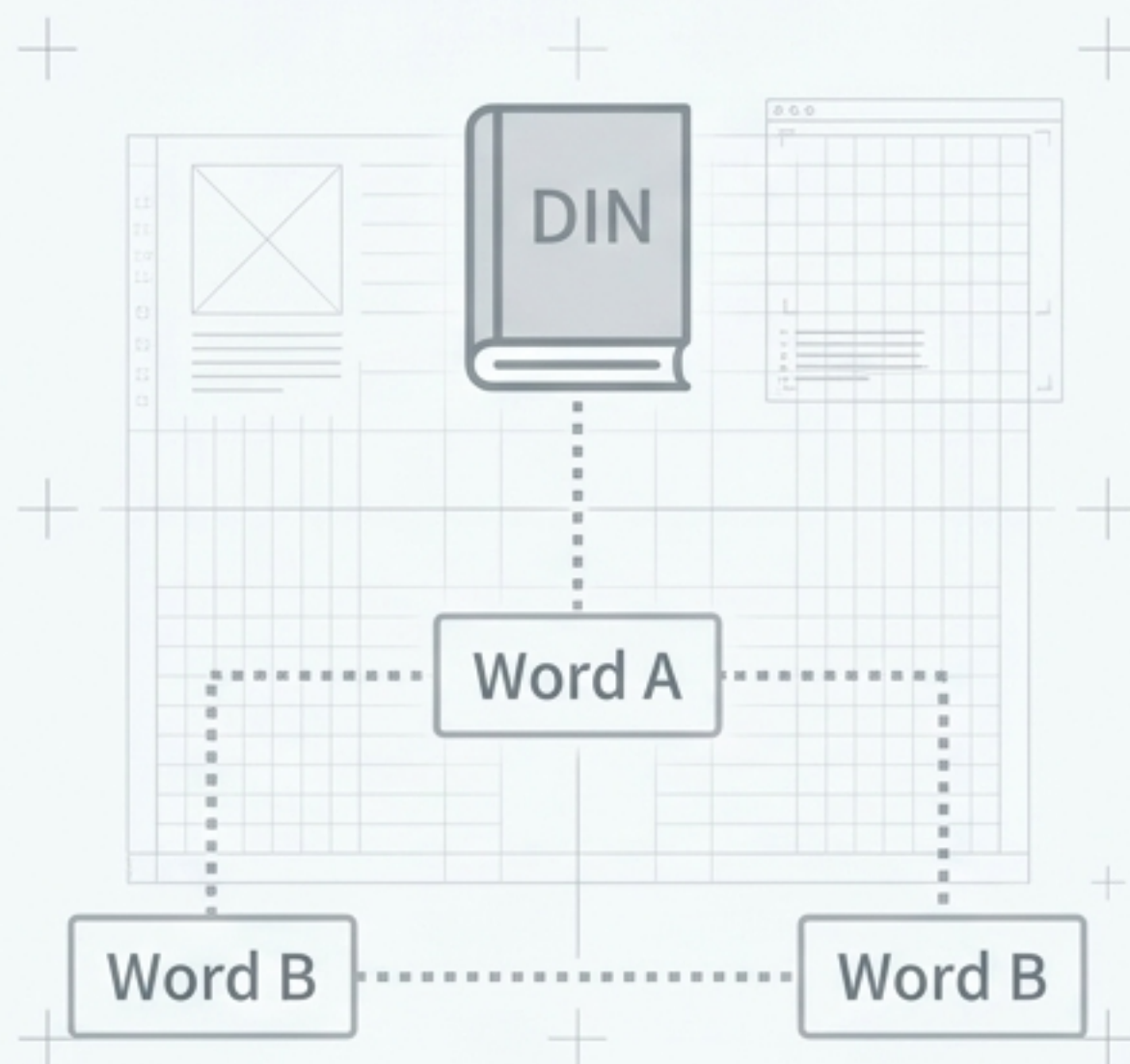
特許検索競技大会の過去問検証で再現率100%(上位30件)を達成

成果

上位30件の目視確認で全分野「再現率100%」を達成。

コア技術の解剖：「類語シソーラス拡張」の真価

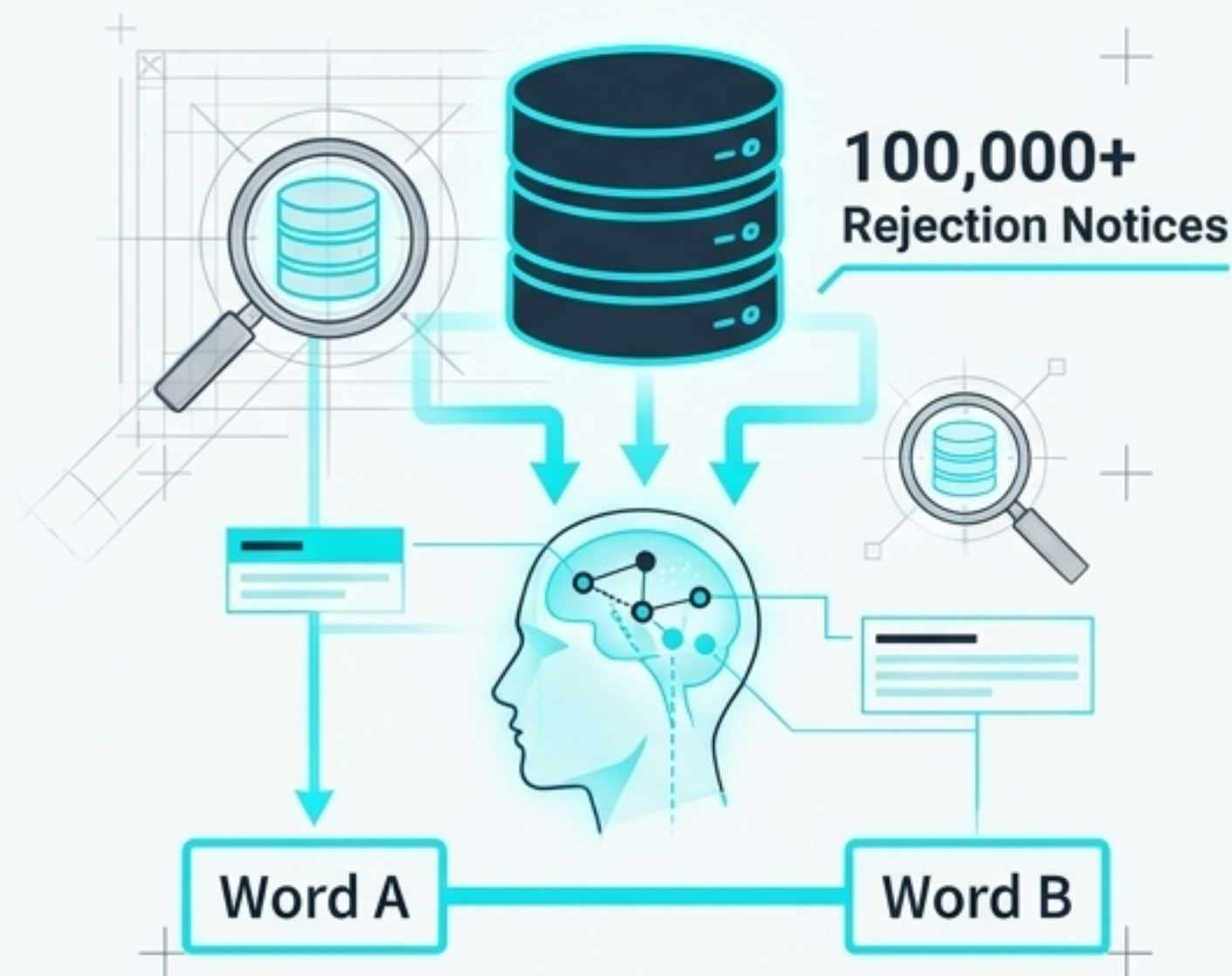
従来のキーワード検索



辞書的・統計的な共起関係。

実務の文脈（審査官の認定）を反映しない。

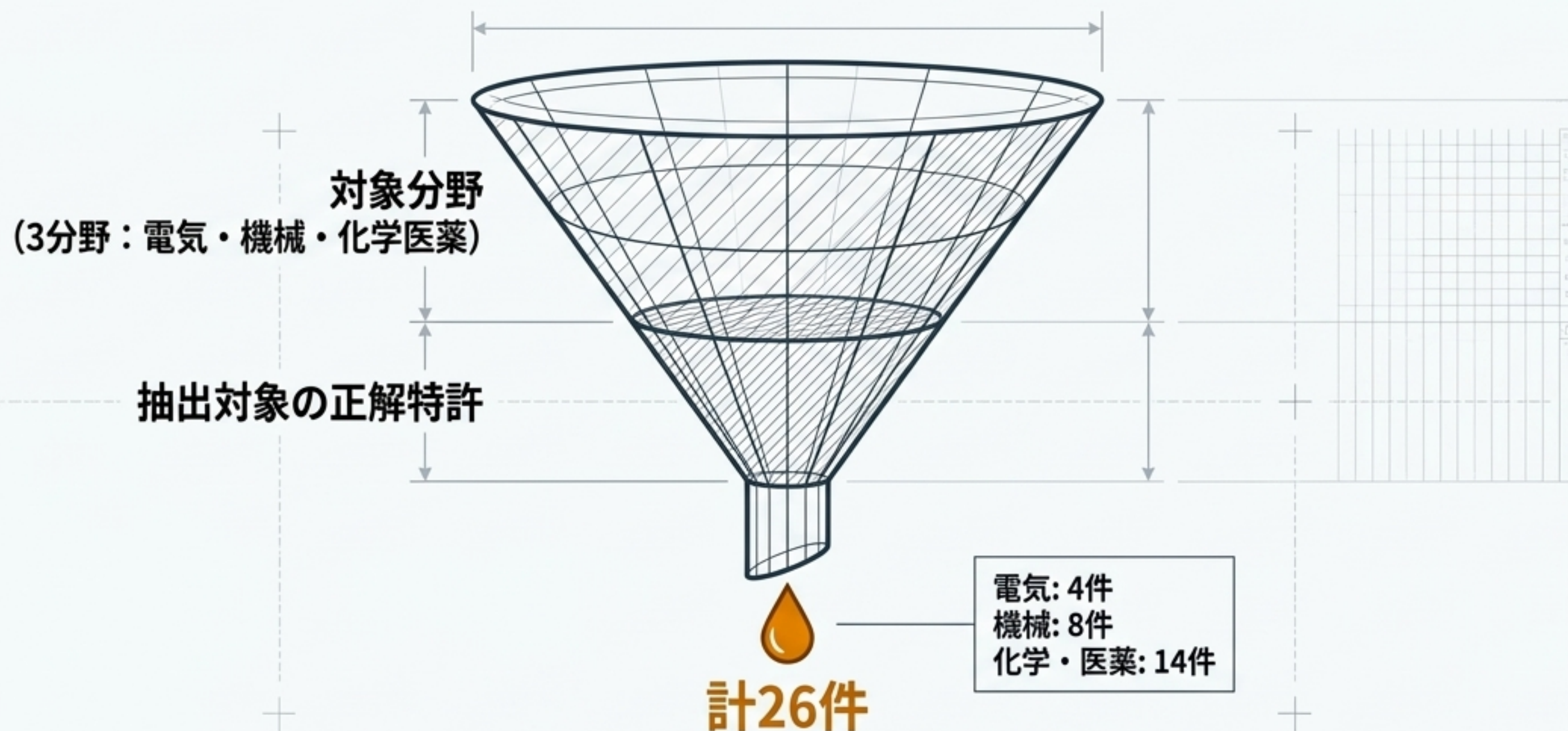
サマリアのアプローチ



審査という実務の場で現に成立した言い換え。

過去の拒絶理由通知書10万件以上から、審査官が「本願発明」と「引用文献」を同一概念と認定した実例を抽出。特許実務に特化した極めて合理的なアプローチ。

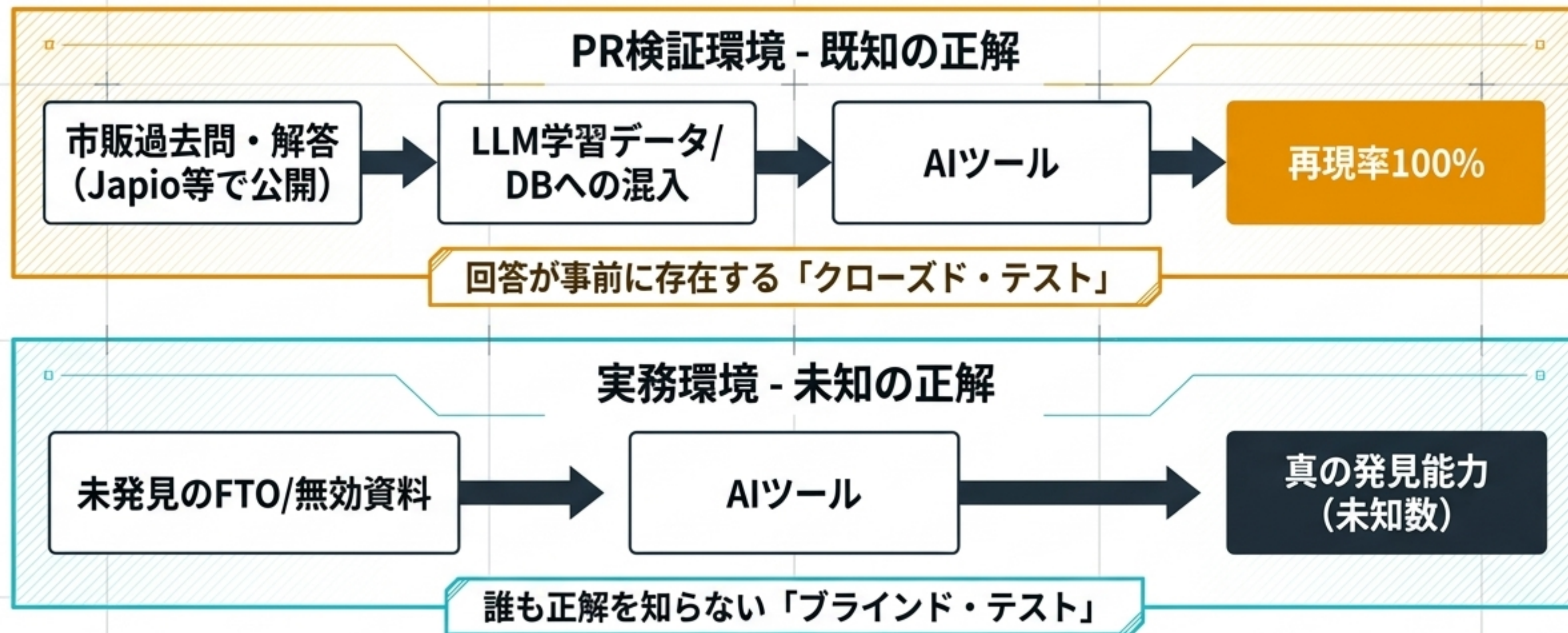
「再現率100%」の分母：統計的限界の可視化



「本結果は3分野・正解特許計26件を対象としたものであり、統計的な有意性を主張する規模ではありません」——
パテント・インテグレーション社リリース文より（誠実な自己留保）

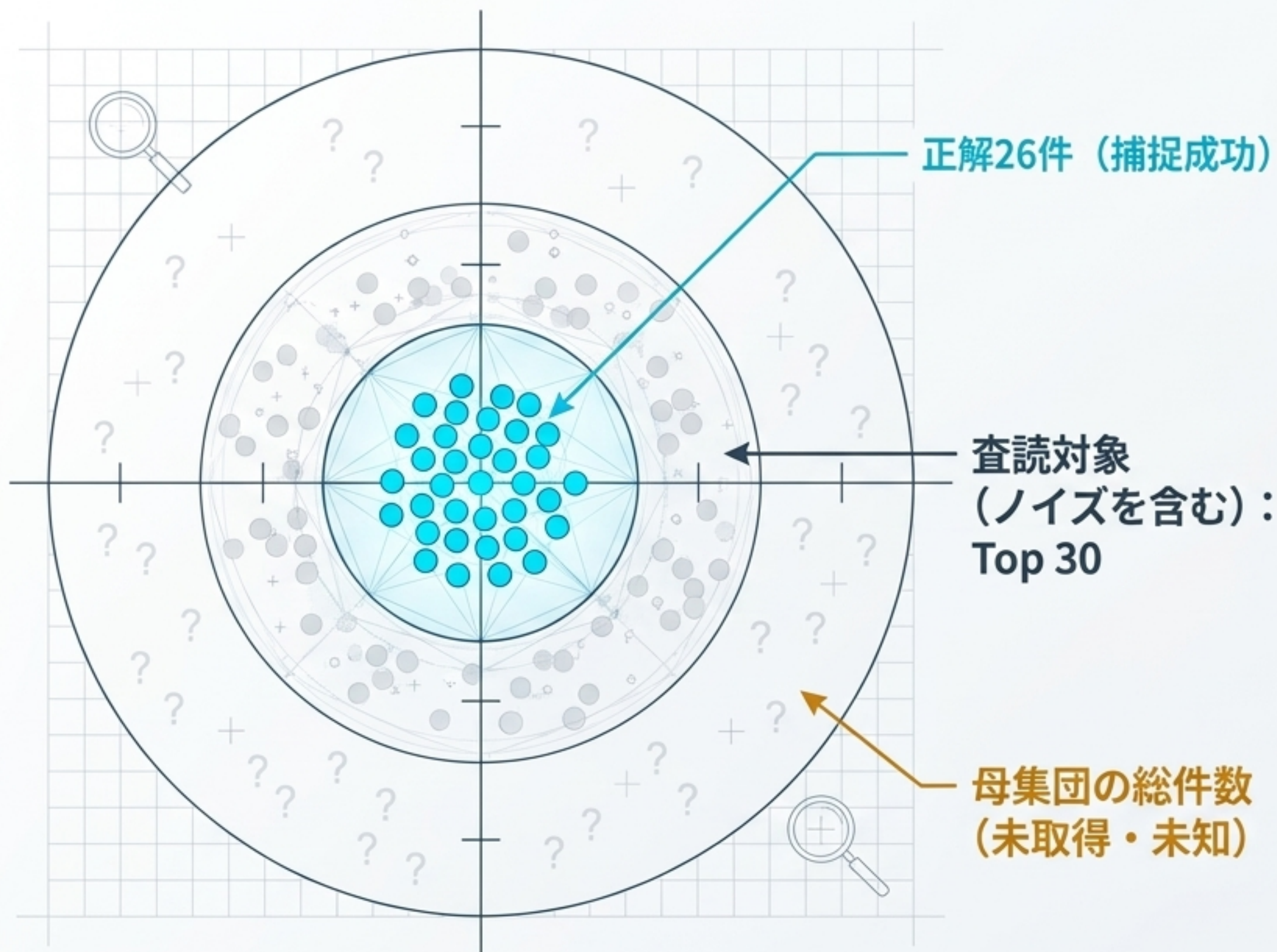
分母が極小の条件下では、母集団を広く取れば100%到達は数学的に生じやすい。

最大の死角：データリーク（汚染） リスクの未検証



過去問の正解は公開情報であり、AIモデルの学習データに既に含まれている可能性（データリーク）を排除できない。未知の正解を探す実務の保証にはならない。

「上位30件確認」の錯覚：見えない適合率とノイズ



- 真の適合率は不明：母集団総件数が未取得のため、上位30件以外の「見落とし」や「無関係な特許の山」がどれだけ存在するかが測定されていない。
- 「上位N件のヒットリスト」という限定条件下での数値であり、コンプリートサーチの証明ではない。

サマリアの進化：読解支援から ハイブリッド検索への移行

Pricing Context

ビジネス版（個人）：月額8,000円
コーポレート版：年額240,000円

Note: 2025年1月にISMS認証取得済

2023年4月

読解支援AIとして開始（検索機能なし、J-PlatPat等と併用）

2024年5月

拒絶対応支援ワークフローAIエージェント搭載

2025年末

検索支援機能追加（検索式生成+AIスクリーニングのハイブリッド型へ）

2026年9月

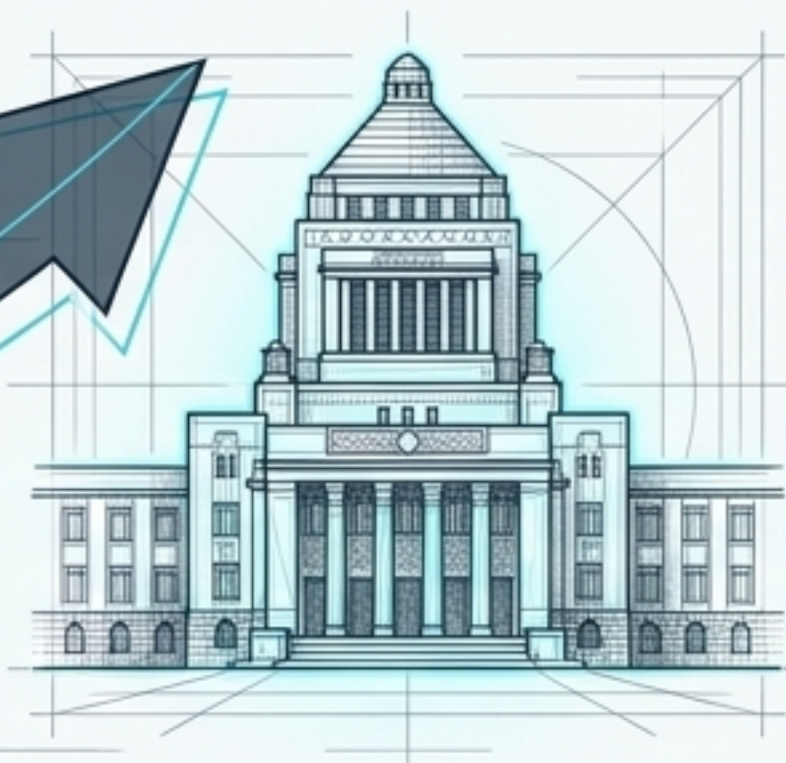
MCP対応（外部LLMから独自特許DBへ直接アクセス可能に）

競争環境と法務コンテキスト：横並び比較が不可能な理由

	Summaria	Patentfield	Amplified
指標の主張	再現率100%（上位30件）	適合率が約3.8倍向上 特許権侵害訴訟 （2024-2026）	成功率87.33%を記録
検証手法	過去問26件・自社検証	独自ベンチマーク	過去調査100万件ベース
直接比較	ベースライン（母集団・正解定義）が完全に異なるため、数値の直接比較は「不可能」。		

パテント・インテグレーション社は競合2社へ特許権侵害訴訟を提起（一部は終了）。
本PRは、激しい競争・牽制環境下でのマーケティング発信であるという割引評価が必要。

追い風となるマクロ環境： 特許庁(JPO)のAIアクションプラン



特許庁の最新動向

「令和7年度改定版 AIアクション・プラン」において、先行技術調査へのAI活用が「実証フェーズ」から「導入フェーズ」へ格上げ。

新設項目

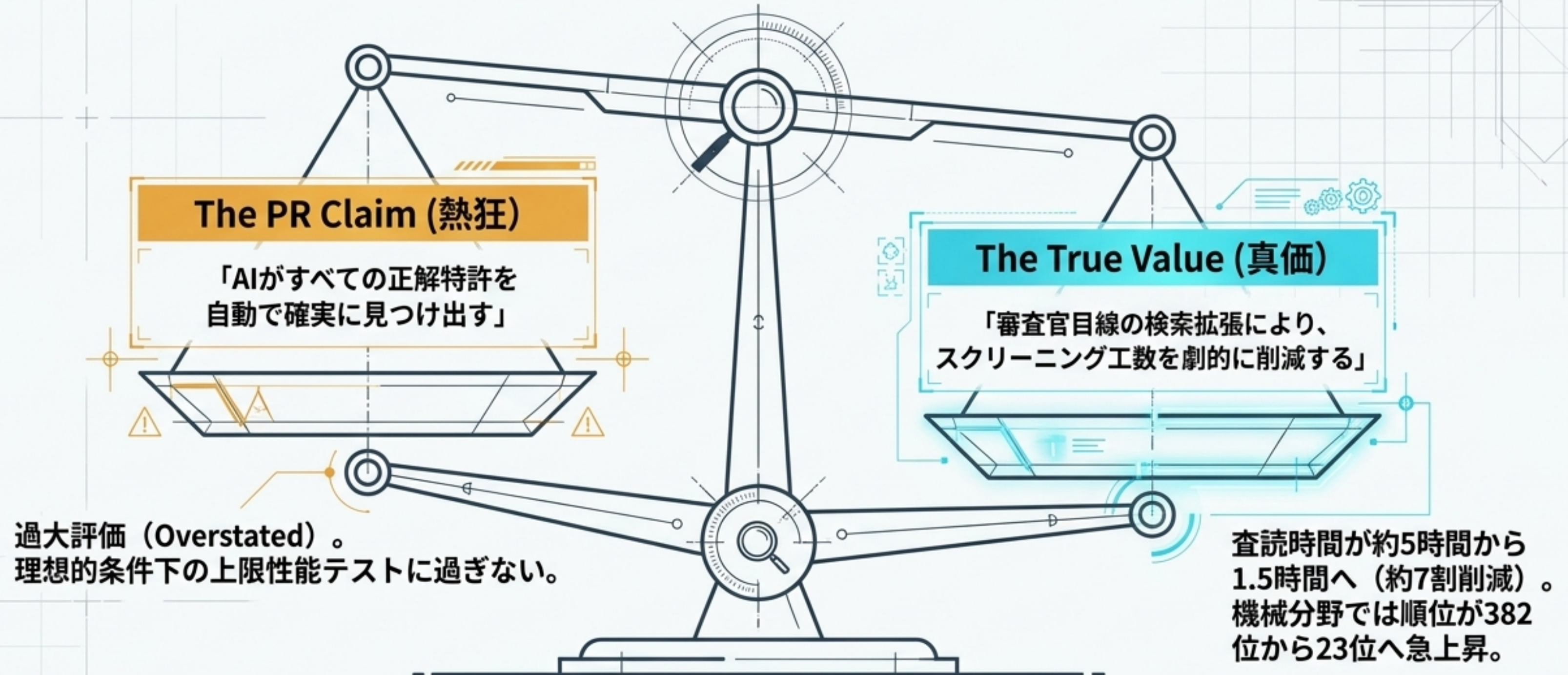
「生成AIの特許審査業務への適用」が正式に明記される（JPO AIビジョン）。

サマリアの「審査官の認定ロジックをAIで模倣する」アプローチは、国家的な知財AI推進のトレンドと完全に方向性が一致しており、長期的ポテンシャルは極めて高い。

SYNTHESIS INSIGHT



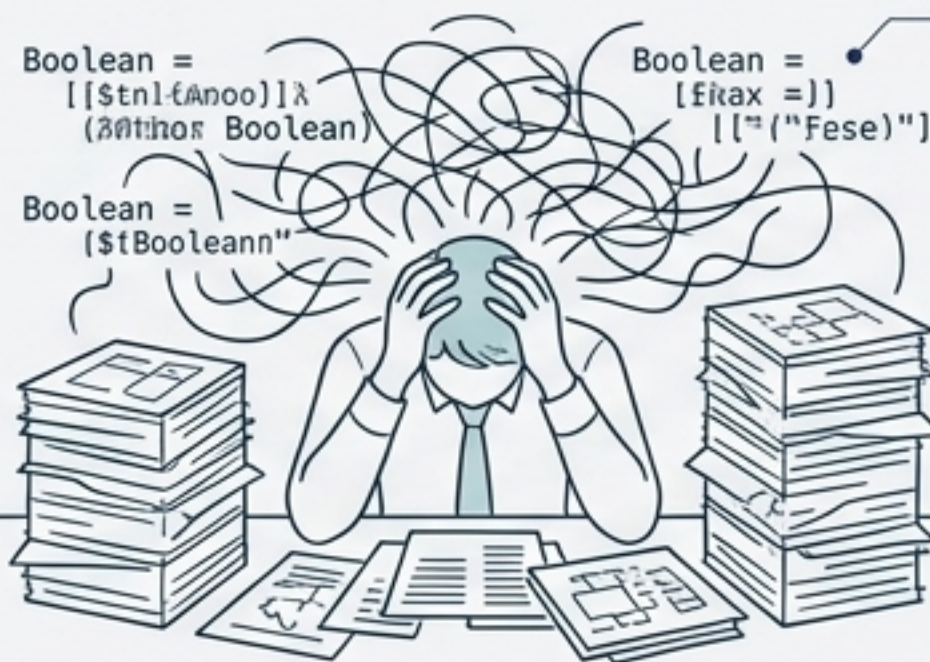
総括：PRの「熱狂」から実務の「真価」を切り離す



実務上の価値は「絶対的な網羅性の保証」ではなく、「高精度の初期仮説構築と圧倒的な時間短縮」にある。

パラダイムシフト：知財専門家に求められる役割の変容

現在～過去



検索実行者 (Search Executioner)

- 複雑な論理式の設計と無限のクエリ調整。
- 膨大なノイズを手作業でスクリーニング。
- 「どう探すか」に時間とリソースを消費。

AI時代



観点設計・結果検証者 (Viewpoint Designer & Verifier)

- AIに対する「正解（検索意図）」の定義とプロンプト設計。
- 出力結果の妥当性評価と、見落とししリスクの法的判断。
- 「何が法的リスクか」の判断にリソースを集中。

戦略的導入プレイブック： リスクを統制する3ステップ

Step 3: 本格運用 (Full Integration)

Action: 拒絶理由通知のデータ蓄積が厚い主要分野（電気・機械など）へ展開。

Strategy: 新興分野では他ツール（Patentfield, Amplified等）との併用・比較を継続する。

Step 2: 限定導入 (Limited Rollout)

Action: 技術動向調査や1次スクリーニングなど、見落としリスクの低い業務から適用開始。

Rule: FTO・無効資料調査においては「**人手による最終確認**」を必須ルールとする。

Step 1: 評価 (Pilot Testing)

Action: 過去に人手で完了した「正解が未知であった実案件（FTO等）」を用いて自社検証を実施。

Goal: 自社データでの真の再現率と査読工数削減効果（3～5割減）の測定。

知財AIツール選定のための評価チェックリスト

PRの「見出し数値」に惑わされず、ベンダーに確認すべき6つの基準：

- | | |
|--|--|
| ☐ 正解集合の定義: テストに使われた正解は「未知」か「既知（過去去問）」か？ | ☐ 真の適合率: 上位N件という限定を外した場合の適合率は測定されているか？ |
| ☐ 母集団データの開示: 母集団の総件数と、対象外となったノイズの量は示されているか？ | ☐ 情報セキュリティ: ISMS認証等の取得状況と、入力データの二次利用ポリシーは？ |
| ☐ データリーク対策: LLM学習データへのテストデータの混入リスクはどう排除されているか？ | ☐ 法務的安定性: ベンダー自身の特許権侵害リスクや係争状況はクリアか？ |

結論：最終的な「保証」の所在

「AIの目的は『100%の保証』を提供するツールを探すことではない。
言語的・機械 重労働をAIに委ね、人間の専門家が『最終的な法的保証』
に専念できる強靱なワークフローを構築することである。」

サマリアの「類語シソーラス拡張」は、その強靱なワークフロー構築に向けた極めて有力な一歩である。誇大PRの裏にある、確かな技術的価値を見極めることが実務家の責務である。